

香港、マカオにおける中国語母語話者を対象とした  
片仮名先習に関する研究

A Study of Teaching Katakana First for Chinese Language Speakers  
in Hong Kong and Macau

郡司 拓也  
嶺南大学

要旨

本研究は一般に広く行われている平仮名先習とあまり一般的ではないと思われる片仮名先習を比較調査し、学習者の片仮名への苦手意識に顕著な差が見られるかどうか明らかにすることを目的とする。

そこで本研究では「一般的な平仮名先習よりも、片仮名先習のほうが、片仮名への苦手意識が低くなる」という仮説を検証した。

被験者は香港、マカオの大学で選択科目の日本語を履修する中国語母語話者の学生で、実験群と統制群にわけ、実験群では片仮名を平仮名よりも先に導入する方法で、統制群では平仮名を導入した後に片仮名を導入する一般的な方法で仮名文字の導入を行い、その後再生テストとアンケート調査を実施し、分析した。

今回の調査結果から、まず学習者は先に学んだ仮名文字を易しいと感じる傾向が見られることが明らかとなった。

また片仮名の音から文字の形を認識すると言う点に関して、片仮名先習のほうが平仮名先習より苦手意識を感じにくいということが明らかとなった。

さらに再生テストの結果からは片仮名先習のほうが平仮名先習よりも平仮名、片仮名ともに平均点が高く、平仮名先習に比べ、平仮名の定着においても特に支障は見られず、むしろ良い結果となった。

キーワード:

中国語母語話者、片仮名先習、文字教育、苦手意識

# 香港、マカオにおける中国語母語話者を対象とした 片仮名先習に関する研究

郡司 拓也  
嶺南大学

## 1. はじめに

河原崎（1989）も述べているように、日本語教育において、片仮名はあまり重視されていない。これは片仮名が主に外来語の表記や擬声語の表記などに限られており、日本語教育の最初の段階においてはそれほど使用される場面が多くないことに起因していると考えられてきた。

そのため、多くの日本語教育機関において、平仮名がまず先に丁寧に導入され、片仮名はその後に付随的に導入されてきたのであろう。

しかし、大学や日本語学校などで日本語を毎日のように学んでいる学習者はまだしも、香港やマカオの大学で選択科目として日本語を学んでいる学習者の場合、時間的制約から仮名文字の指導になかなか時間を費やすのが困難なことも多く、50音図を利用し、仮名文字の形や音、書き順を紹介するだけという導入法が一般的なようだ。また一般的に週に3時間程度しか授業がないため、日本語に触れる機会も少なく、片仮名を学んでから2年、3年経ってもまだ片仮名がなかなか容易に読み書きできないというケースも少なくない。

近年、中山（2007）の調査にあるように外来語を中心に片仮名語が日本語の語彙に占める割合は以前よりもかなり高くなっており、片仮名教育の見直しをすべきだという声も増えつつあるようである。

しかし、片仮名教育に関する論文の多くは片仮名語の教育に関するものがほとんどであり、片仮名の文字教育に関するものはあまり見られない。

仮名文字の導入法に関しては中山（2006）の調査結果にあるように平仮名を先に導入し、その後片仮名を導入するというのが一般的であるようだが、片仮名を先習することにより、学習者からしばしば耳にする片仮名が苦手だと言う問題を少しでも改善できるのではないかと考えたのが、本研究の出発点である。

## 2. 先行研究などから見る片仮名教育の状況

### 2.1 学習者の片仮名への苦手意識

中山（2006）の国内の日本語教育機関に在籍している479名の日本語学習者を対象に行った調査の中で、片仮名と平仮名を読むことに対する意識調査の項目がある。その結果、片仮名に対して難しくないと回答したのは27.3%に過ぎなかった。

**香港、マカオにおける中国語母語話者を対象とした  
片仮名先習に関する研究**

のに対し、平仮名では78.7%が難しくないと回答しており、対照的な結果が出ている。この調査では母語や学習歴などが様々であるので、その要因を分析することは難しい。しかし調査対象者の59.5%がすでに1年以上日本で日本語を学習しており、35.5%は日本語能力試験のN1受験経験者であるということを考えると、日本で生活し、日本語を学んでいる中上級レベルの日本語学習者であっても片仮名に対して難しいと感じている学習者が多いということは驚きを隠せない。教科書だけでなく、教室外でも片仮名語を含む多くの日本語の語彙に触れる機会の多い日本在住の学習者でさえこれだけの苦手意識を持っているのだから、日本国外で教科書以外の日本語に触れる機会のあまり多くない学習者が片仮名に対して苦手意識を持つであろうことは容易に想像がつく。

**表1 片仮名、平仮名を読むことに対する学習者の意識**

Q15(1)カタカナを読むことについて、どのように感じていますか。

Q15(2)それでは、ひらがなを読むことについて、どのように感じていますか。

	とても難しい	難しい	少し難しい	難しくない	無回答
カタカナ	27(5.6%)	109(22.8%)	209(43.6%)	131(27.3%)	3(0.6%)
ひらがな	3(0.6%)	10(2.1%)	83(17.3%)	377(78.7%)	6(0.1%)

中山 (2006)

## 2.2 教科書に占める片仮名語の占める割合

それでは特に日本国外で日本語を学習する場合によりどころとなる教科書において、片仮名語はどのぐらいの割合を占めるのだろうか。香港、マカオでの初級レベルの学習者の使用を想定し、国際交流基金日本語国際センター図書館が所蔵する初級レベルの日本語総合教科書の中で、香港、マカオの高等教育機関での使用が確認されているもの、また香港で出版、または販売が確認されている12冊を対象に、片仮名使用語彙数の割合を調査した。その結果、異なり語数でその平均使用率はわずか8.1%であることが明らかとなった。

**表2 香港、マカオの日本語初級教科書に占める片仮名語の使用割合**

No.	書名	総語数（異なり語数）	片仮名使用語数	割合
1	ジェイ・ブリッジ 1	880	116	13.2%
2	ジェイ・ブリッジ 2	883	66	7.5%
3	日本語初歩	1702	101	5.9%
4	みんなの日本語初級 1	1043	42	4.0%
5	みんなの日本語初級 2	1075	108	10.0%
6	新文化初級 1, 2	1908	269	14.1%
7	大地 1, 2	2180	302	13.9%
8	日本語 1, 2 (香港中文大学編)	1735	130	7.5%
9	日語基礎講座 1	255	6	2.4%
10	日語基礎講座 2	350	22	6.3%
11	日語基礎講座 3	264	17	6.4%
12	日語基礎講座 4	325	19	5.8%
平均 8.1%				

ちなみに中山（2007）の資料に収録されていた日本語学習教材の総語彙数に占める片仮名語数の割合は総合教科書だけでなく、文字学習教材なども含み、異なり語数でなく、延べ語数であるという違いはあるものの、初級 11.9%、初中級 12.1%、中級 12%、上級 6.3%となっており、初級において約 10%という点では本稿の調査結果とほぼ変わらないことが明らかとなった。中上級レベルでもその割合は大きく変わらないが、一般に中上級では教科書以外の書籍や新聞などの生教材などに触れる機会も増えると思われるので、片仮名語に触れる機会も実際は初級よりは多いかもしれない。しかし、初級レベルの場合、いわゆる基本語彙や文型の習得が中心となるので、書籍や新聞などの教科書以外の生教材に触れる機会も少なく、教師や教育機関が特に意識しない限り、片仮名に触れる機会はかなり少なくなることは否めない。

### 2.3 片仮名教育への教師や教育機関の意識

それでは教師や教育機関は片仮名教育に対してどのように取り組んできたのだろうか。河原崎（1989）は「日本語教育の中でも、片仮名ほど粗末に扱われているものはないだろう。まず教材がない。研究にいたっては数えるぐらいで、その教授法はいまだ未開発である。」とし、「外国人に対する片仮名教育に関して言えば、昭和三〇年代から、進歩が見られないといっても過言ではない。」とまで述べている。また片仮名の文字そのものの教授法に関して、「片仮名は日本語教育の入門期に指導されるが、その後は系統立って指導されない。」と述べ、また「仮名の教科書も少なく、平仮名はともかく、片仮名になると、五十音図ですまってしまう機関が多い。」と平仮名に比べ、片仮名の教育には力が入れられていないのではないかという指摘をしている。

河原崎の指摘から約20年経ったにもかかわらず、中山（2007）は状況がその指摘当時とあまり変わっていないと述べ、教師や教育機関への調査結果から、片仮名に関して平仮名と同程度の読み書き能力をつけることを目指すと回答した機関は片仮名文字教育を行っている48機関中28機関と6割弱に過ぎず、十分定着しているという回答はわずか2機関で、かなり定着しているという21機関を合わせても、5割に満たないというデータを示した上で、「日本社会において日本語を学習し、日本語を用いて生活するにあたっては、カタカナは避けては通れないものであるにもかかわらず、日本語教育においては、文字も語彙もその存在に見合うだけの教育がなされていない。だからこそカタカナ教育の確立が必要なのである。」と主張している。

### 2.4 先行研究における片仮名教育の改善策

中山（2007）ではそういった状況の打開策として、片仮名の導入時期を入門期から初級期にずらすという方法を提案し、「漢字学習にある程度慣れてきたところで、一日に数語のカタカナ語を入れながら、そこに使われている文字を入れていく。初級が終わるころには、文字全てとある程度のカタカナ語が定着している、という方法である。」とその方法について述べている。そして、その実施のためには「カタカナ語を吟味して選定した教材」が必要であり、その導入語彙について、「語彙調査の結果から、まず基本カタカナ語を選定し、その基本カタカナ語の中から選ぶのが望ましい。」と主張している。

ここで注目すべき点は片仮名教育の重要性を指摘しているが、その中心は片仮名の語彙であり、片仮名の文字そのものではないというところである。これは中

山（2007）に収録されている他の論文でも同様であり、片仮名や片仮名教育に関する先行研究では、そのほとんどが外来語の表記の問題とその習得の困難がテーマとなっており、片仮名の文字教育に関するものは、わずかに連想法を使ったものなどを除くとほとんど見られない。これは郡司（2014）でも指摘しているように片仮名だけでなく、平仮名に関しても同様であるが、中でも片仮名は平仮名に比べてより少ない。

平仮名も片仮名も漢字から派生した表音文字という点で共通しており、文字数もまた同じである。にもかかわらず、表1のように片仮名と平仮名とで苦手意識に非常に大きな差が出てくるのは何故だろうか。もちろん平仮名に比べ、表2のように教科書に提示される片仮名で表記される語彙が少なく、目にする機会が少ないということが考えられるが、先程の中山（2007）の調査結果にもあるように導入段階での教育機関や教師側の片仮名の扱いの軽さも片仮名習得への苦手意識を生んでいる要因となっているのではないだろうか。そしてそのことがもし学習者に「片仮名は平仮名のついでに覚えさせられるあまり重要でない文字」という認識を持たせてしまっているとしたら、教育機関や教師側が片仮名への扱いを変えることで、学習者の片仮名への苦手意識を減らすことができるかもしれない。つまり片仮名は平仮名のついでに学ぶものではないという意識付けをするという改善策である。

### 3. 研究の目的と方法

本研究は平仮名と片仮名の導入順序について、一般に広く行われている平仮名先習とあまり一般的ではないと言われている片仮名先習の2つの仮名文字導入法を比較調査し、学習者の片仮名に対する苦手意識に顕著な差が見られるかどうかを明らかにすることを目的とする。

そこで「一般的な平仮名先習よりも、片仮名先習のほうが、片仮名への苦手意識が低くなる」という仮説を以下の手順により検証していく。

#### 3.1 調査対象と調査の手順

被験者は香港、マカオの大学で選択科目として日本語を履修する中国語母語話者の学生である。母語による影響を排除するため、それ以外の母語話者は調査対象から外した。そのうち、既習者を除いた日本語未習者の254名を主な調査対象とした。この254名のうち、176名を実験群、78名を統制群<sup>1</sup>として扱った。

---

<sup>1</sup> 78名の統制群の調査対象者は郡司（2014）における字源法を用いた仮名文字導入法の調査対象とした中国語母語話者であり、その際の調査データを今回の実験群との比較に利用している。

## 香港、マカオにおける中国語母語話者を対象とした 片仮名先習に関する研究

実験群では片仮名を平仮名よりも先に導入する順序で、統制群では平仮名を導入した後に片仮名を導入する一般的な順序で仮名文字の導入を行い、その後再生テストとアンケート調査を実施し、分析した<sup>2</sup>。

調査にあたっては両群の等質性を担保するために、仮名文字の導入順序以外の教材や導入方法、導入に費やす時間などに違いが出ないように細心の注意を払った。

なお既に数か月から1年程度日本語を学習した経験のある既習者99名（実験群68名、統制群31名）に関しては上記の調査対象外としているが、従来型の五十音図を基に仮名文字を、平仮名、片仮名の順序で習得した学習者であることから、参考として、未習者である被験者と同様の再生テストとアンケート調査を実施し、その結果の比較を一部調査で行った。具体的な調査の手順は以下のとおりである。

まず1週目に実験群、統制群ともに日本語の音についてローマ字を使用して導入、練習した。次に2週目に授業の約1時間を使って、実験群では片仮名を、そして統制群では平仮名を導入した。そして3週目にそれぞれ、片仮名、平仮名の再生テストとアンケートを実施した後、実験群では平仮名、統制群では片仮名を約1時間かけて導入し、最後に4週目にそれぞれ平仮名、片仮名について3週目と同様の再生テストとアンケートを実施した。

仮名文字の導入方法に関しては実験群、統制群ともに郡司（2014）と同様、富山大学留学生センターのオンライン教材を使用し、字源となる漢字を確認し、その中国語音から仮名文字の音を類推するという連想法の手法を用いた。授業後はテスト前に練習帳への書き取りを宿題とし、またオンライン教材で自習するよう促した。教室外での自習などについてはとくに制限しなかった。<sup>3</sup>

### 3.2 再生テストとアンケート調査の内容

再生テストは平仮名、片仮名の文字を見て、その音を再生できるかどうかを調査する目的で行った。テスト内容は郡司（2014）と同じものであり、平仮名、片仮名のそれぞれ46文字の直音から30文字ずつを抽出したものとなっており、解答は1週目の授業で導入したローマ字表記を用いて行う形式を採用した。46文字のすべてを出題しなかったのは、通常の授業内で行った調査であることから、

<sup>2</sup> 調査対象者を含む全受講生にはあらかじめ再生テストの結果などは成績に関係はなく、調査目的のみに使用する旨を説明しており、同意を得た上で通常授業の中で調査を行った。

<sup>3</sup> Matsunaga (2003) が述べているように、テストを後日行う場合、被験者が実験授業外で自習した影響がテストに反映される可能性が考えられるが、本研究では通常の授業の一環で調査を実施することから、授業外での復習を禁止するようなことはできない。

授業進度に影響が出ないように、テストの実施時間を少しでも短縮したかったという事情と、すべての文字を出題すると適当にすべての回答欄を埋めようとする被験者が出てくるのではないかという懸念があったことによる。

またテストと同時にアンケートを実施した。平仮名、片仮名それぞれについて、文字の音を覚えることと文字の形を覚えることに対する苦手意識について、「とても難しい」、「難しい」、「あまり難しくない」、「簡単」という4段階で回答をするという形式で行った。

## 4. 分析結果と考察

### 4.1 再生テストの結果とその分析

まず再生テストの結果について分析する。表3にあるとおり、平仮名、片仮名ともに片仮名先習のほうが平均点が高いという結果となった。平仮名先習のほうが平仮名の平均点が片仮名先習に比べ、3.94点も低かった点が注目されるが、この点については、文字の学習方法やテスト形式に慣れたため、最初に学んだ平仮名よりも、次に学んだ片仮名のほうが平均点が高くなったのかもしれない。またいずれの方法でも片仮名の平均点が高い結果となったことから考えると、文字自体の習得に関しては平仮名より、片仮名の方が少なくとも短期記憶としては容易であるという可能性が考えられる。

なお既習者の結果に関しては平仮名も片仮名も平均点は28点台と高く、差は非常に小さかった。

表3. テスト結果

30点満点	平仮名	片仮名
平仮名先習	21.87	25.77
片仮名先習	25.81	26.51
既習者(参考)	28.56	28.37

### 4.2 アンケート調査の結果とその分析

次に再生テストと同時に行ったアンケート調査について分析する。アンケート調査は2種類あり、平仮名と片仮名について、全体的に見てどちらが易しいと思うかという質問と平仮名と片仮名の音と形に関して、それぞれどんな点が難しい、あるいは易しいと感じるのかという質問を行った。



#### 4.2.1 平仮名と片仮名に対する全体的な印象

まず平仮名と片仮名に対する全体的な印象に関する調査では、「一般的な平仮名先習よりも、片仮名先習のほうが、片仮名への苦手意識が低くなる」という仮説を、「片仮名を先習した集団では平仮名より片仮名のほうが易しいという印象を持つ」と置き換え、これを立証することとした。

表4. 平仮名と片仮名に対する全体的な印象

	平仮名易しい	片仮名易しい	総計
片仮名先習	42	110	152
平仮名先習	41	25	66
総計	83	135	218

検定統計量  $T=23.22^{***}$

\*は  $P<.1$ 、\*\*は  $P<.05$ 、\*\*\*は  $P<.01$  を表す

アンケートでは仮名文字学習後の印象として、「平仮名のほうが易しい」、「片仮名のほうが易しい」、「どちらも易しい」という3つの選択肢から自分の感覚に最も近いものを選んでもらった。そしてその中から、「平仮名のほうが易しい」と「片仮名のほうが易しい」という回答を抽出し、 $2 \times 2$ のクロス表に再編したうえで、クロス表分析を行い、カイ二乗検定を行い、仮説を検証した。

その結果、1%水準で有意差があることが認められた。つまり片仮名、平仮名ともに、先に導入された仮名文字のほうが易しいと感ずるということが明らかとなった。

興味深いのは、先程の表3の再生テストの結果で、片仮名先習を行った実験群では、平仮名と片仮名の再生テストの平均点の差がほとんどなかったが、平仮名先習を行った統制群では再生テストの平均点では平仮名より片仮名のほうが高かったにもかかわらず、平仮名のほうが易しいという回答が回答全体の半数以上(52.6%)を占めた点である。

なお、従来型の50音図を元に仮名文字を平仮名先習で学んだ既習者との比較を行って見たところ、今回の調査の統制群と同様に平仮名のほうが易しいという回答が多く、その割合はより高かった<sup>4</sup>。このことから50音図を使うか、連想法を使うかという導入方法の違いに関わらず、先に導入された仮名文字のほうが易しいと感ずると言えそうである。

<sup>4</sup> 2.2で述べたように、教科書の中では片仮名より平仮名に触れる機会のほうが非常に多いので、そうした学習経験の影響が表れているのかもしれない。

**表 5. 平仮名と片仮名に対する全体的な印象（既習者との比較）**

	平仮名易しい	片仮名易しい	総計
片仮名先習	42(27.6%)	110(72.4%)	152(100%)
平仮名先習	41(62.1%)	25(37.9%)	66(100%)
既習者	63(82.9%)	13(17.1%)	76(100%)

#### 4.2.2 平仮名と片仮名のそれぞれの音と形に対する個々の苦手意識の違い

次に平仮名と片仮名のそれぞれの音と形に対する苦手意識に関して行ったアンケート調査の結果についてクロス表分析を行った。片仮名と平仮名のそれぞれ音と形に対する苦手意識について、片仮名先習と平仮名先習の導入順序の違いによって顕著な差異が見られるかどうか、カイ二乗乗検定を行って検証した。

しかし「とても難しい」「難しい」「あまり難しくない」「簡単」という4段階での結果では値が0となり、独立性の検定を行うことができない項目があったため、「とても難しい」と「難しい」を合わせて「難しい」に、「あまり難しくない」と「簡単」を合わせて「易しい」にまとめて2段階とし、2×2のクロス表に再編した。そのうえで、どの項目に関して強い苦手意識が見られるかという分析を行った。

その結果、片仮名の形に関して、片仮名先習と平仮名先習の間に5%水準で有意差があることが明らかになった。

このことから片仮名の形状を学ぶという点に関し、片仮名先習は一般的に行われている平仮名先習に比べて、学習者の苦手意識を軽減させるある一定の効果があると考えられる。

**表 6. 平仮名の形**

	難しい	易しい	総計
片仮名先習	96	80	176
平仮名先習	47	30	77
総計	143	110	253

検定統計量 $T=0.92$

\*は $P<.1$ 、\*\*は $P<.05$ 、\*\*\*は $P<.01$ を表す

**表 7. 平仮名の音**

	難しい	易しい	総計
片仮名先習	66	110	176
平仮名先習	35	42	77
総計	101	152	253

検定統計量 $T=141$

\*は $P<.1$ 、\*\*は $P<.05$ 、\*\*\*は $P<.01$ を表す

**表 8. 片仮名の形**

	難しい	易しい	総計
片仮名先習	73	103	176
平仮名先習	43	35	78
総計	116	138	254

検定統計量 $T=4.06^{**}$

\*は $P<.1$ 、\*\*は $P<.05$ 、\*\*\*は $P<.01$ を表す

**表 9. 片仮名の音**

	難しい	易しい	総計
片仮名先習	59	117	176
平仮名先習	31	46	77
総計	90	163	253

検定統計量 $T=1.06$

\*は $P<.1$ 、\*\*は $P<.05$ 、\*\*\*は $P<.01$ を表す

## 5. まとめ

今回の調査結果から、まず学習者は先に学んだ仮名文字を易しいと感じる傾向が見られることが明らかとなった。これは表1の中山(2006)の調査結果とも矛盾しない。

また片仮名の音から文字の形を認識するという点に関して、片仮名先習のほうが平仮名先習より苦手意識を感じにくいということが明らかとなった。ただし、この仮名文字の形や音に対する苦手意識に関する調査に関しては、仮名文字の字源となる漢字を利用した教授法を利用して調査を行っているため、従来型の50音図を利用した仮名文字教授法など、その他の方法でも同様の結果が出るのかどうかは明らかとなっていない。この点は今後の課題としたい。

さらに再生テストの結果からは片仮名先習のほうが平仮名先習よりも平仮名、片仮名ともに平均点が高く、平仮名先習に比べ、平仮名の定着においても特に支障は見られず、むしろ良い結果となった<sup>5</sup>。

この調査結果自体はあくまで短期記憶に関する結果に過ぎないが、その後の授業においても、片仮名先習を行ったことで、平仮名を使用した語彙や文型の習得などの際に、平仮名先習と比較して、特に学習者が困難を感じているような様子は見られなかった。

これは漢字と平仮名の語彙は教科書の90%近くを占めており、語彙や文法などを学ぶ中で、平仮名を見て漢字の語彙を発音をしたり、平仮名を読み書きする機会が非常に多いことに起因するのではないかと思われるが、実際に約3ヶ月のコース終了時に平仮名の読み書きに関してはほとんどの学生が十分に習得できていた。

それに対して、片仮名に関してはやはり時間が経つと、教科書で提示される機会も平仮名と比較すると少ないためか、平仮名に比べると、読み書きが十分できているとはいえない学生も多少目につくこともあった。この点に関しては教育機関や教師側が意識して、そのコース、学習者に適切で、重要と思われる片仮名語彙を継続して、提示し、触れさせることで、短期記憶から長期記憶へと繋げていけるのではないかと思われる。その際、先行研究にあるような片仮名語彙に関する研究が参考になるだろう。

片仮名先習により、片仮名の文字への苦手意識が減少することで、その次の段階の片仮名の語彙の教育においても学習効果が上がることを期待したい。

---

<sup>5</sup> 今回の再生テストでは仮名文字の「読み」の定着度しか調べていないので、「書き」の定着度に関しては明らかになっていない。

## 参考文献

- 河原崎幹夫(1989) 「片仮名の指導法」加藤彰彦(編)『講座日本語と日本語教育 9 日本語の文字・表記(下)』明治書院, 245-289
- 郡司拓也(2014) 「香港、マカオの高等教育における中国語母語話者を対象とした仮名文字の教授法の研究—その字源を利用して—」第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム論文集編集会編『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』ココ出版, 229-241
- 富山大学留学生センター 日本語学習支援サイト RAICHO 「日本語自己学習」  
<[http://raicho.ier.u-toyama.ac.jp/raicho-cgi-bin/quiz/quiz.cgi?mode=list\\_tests](http://raicho.ier.u-toyama.ac.jp/raicho-cgi-bin/quiz/quiz.cgi?mode=list_tests)>(2015年10月31日)
- 中山恵利子(2006) 『日本語教育現場におけるカタカナ教育の実態調査』(平成17年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号17520358 平成17年度研究成果報告書
- 中山恵利子(2007) 『カタカナ教育の基礎的研究—日本語教育における分野の確立を目指して—』(平成17年度～18年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号17520358 研究成果報告書
- Matsunaga, Sachiko. (2003) Effects of Mnemonics on Immediate and Delayed Recalls of Hiragana by Learners of Japanese as a Foreign Language, “世界の日本語教育” 13, 19-40